

社会で活躍する卒業生

A graduate of Shimane University
No. 19

電線等保守管理

卒業後も様々な分野で活躍する島大OB・OG。その中から、山陰をフィールドに活躍する注目の人を紹介するシリーズ企画です。今回は山陰ケーブルビジョン株式会社に勤める児島さんに、現在の仕事内容やそこに至るまでの道のり、今後の展望についてうかがいました。



Profile 児島 由季 さん

山陰ケーブルビジョン株式会社
お客様本部技術課
HFC撤去係 係長

島根県出雲市出身。2017年3月に法文学部社会文化学科を卒業し、同年4月に山陰ケーブルビジョン株式会社に入社する。営業、制作を経て現在、技術課でケーブルの保守管理を担当。会社の未来戦略を考える「2030ビジョン推進室」にも所属し、新事業にも挑む。

光ケーブル移行に従い同軸ケーブルを撤去 連携の重要性を再認識

地域に密着したメディアとして親しまれているケーブルテレビ(CATV)。その名の通り、「ケーブル」を用いて行われる有線放送のため、アンテナで電波を受信して放送される地上デジタルや衛星放送に比べ、受信電波が安定しているのが大きな特徴です。山間部や大型ビル、空港などの難視聴地域で採用がスタートし、現在は国内総世帯数の約半分である3139万世帯が加入しています。地上放送や衛星放送の再放送を行っているだけでなく、自主制作のコミュニティ番組、インターネットのブロードバンドサービスなども提供。地域コンテンツや情報インフラを活用した地域活性化も担えるとして、存在感を増してきています。

その一つが、島根県松江市と安来市をエリアとする山陰ケーブルビジョン株式会社です。松江市内では「マーブル」、安来市内では「どじょっこテレビ」を展開。1986年の開局以来、インターネットやスマートフォンなどサービスの拡充・高品質化を進め、約5万6000

世帯が加入しています。

同社は2022年3月までに同軸ケーブルから光ケーブルへの移行を完了。電気信号でテレビ映像などの情報を流していた従来の同軸ケーブルに比べ、光学的形態で信号を送る光ケーブルは通信速度が速く、ノイズも拾いにくいいため、利用環境は大幅に向上しました。その陰で進められている作業が、不要になった同軸ケーブルの撤去です。技術課HFC撤去係長の児島由季さんは、「電柱の所有者や電線の止め方、場所などによって作業内容や事務手続きなども微妙に違うので、慣れるまで大変でした」と振り

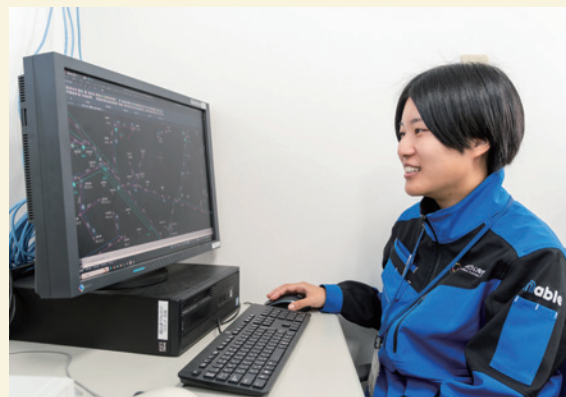
返りつつ、「電柱にはさまざまな線が重なっており、万が一誤った線を撤去してしまえば大事になりかねません。業者さんとの綿密な連携が大事です」と表情を引き締めます。現場で撤去工事を行うのは通信専門業者ですが、工程管理や各種申請書類などを作成・提出するのは児島さんたちの仕事。撤去後に不具合が生じていないかヒアリングを行い、意識の統一を図ります。また、利用世帯を訪問して点検業務を行ったりすることもあります。「たとえ良い番組を作っても視聴者のもとにきちんと届かなければ意味がありません。社内の色々な部署、そして専門業者さんとの連携が重要だと改めて実感しました」。

活気あふれる地域密着メディアで多彩な事業に挑戦

2023年春に技術課に異動するまでの3年間は制作課に所属し、さまざまな番組制作に携わってきました。「豪雨被害に遭って工場の設備などが壊れ、廃業か事業継続かを悩んでいたお茶農家さんへの取材がとても印象に残っています。当初は取材を遠慮されていましたが、最後は

『いい機会を与えてもらった』と感謝して下さいました。私たちの放送がわずかでも支援につながったならうれしいですね。放送後、農家へは多くの応援の声が寄せられ、クラウドファンディングなども活用して、今も事業を継続されているそうです。

在籍していた法文学部社会文化学科では主に地域社会学を研究。卒論では中山間地の課題について聞き取り調査を行うなど、フィールドワークなども積極的に行ってきました。ボランティアや地域のイベント運営にも参加。そんな中で芽生えたのが、「地域で頑張っている人の姿を伝える仕事がいい」という思いでした。選択肢のトップ



CADを操作する児島さん。

にあがったのは、取材対象の姿をリアルに伝えることができる映像メディア。中でも、企画から取材、撮影、編集、原稿まですべて一人で担うことができるケーブルテレビの仕事は魅力的に映ったそうです。「伝えたいと思っている内容を、一貫した形で表現できるのが地域CATVの特徴だと思います」。カメラワークなどは入社後に学び、実務経験を重ねながら技術を磨いていきました。「他社制作の作品を見ると、『どうすればその映像が撮れるんだろう』と気になることも少なくありませんでした」。

番組制作を希望して入社した児島さんですが、技術課への配属を経て、仕事に対する考え方が少し変わりました。「映像制作という仕事は入社のきっかけにはなりませんが、地域貢献には色々な形がありますし、さまざまな部署を経験することで視野も広がりました。選択肢を狭め過ぎないことは大事だと思います」と後輩たちへのメッセージも頂きました。同社の社員平均年齢は30歳代半ば。16年以降は毎年数人新卒を採用しており、職場内は活気にあふれています。「毎年後輩が増えるので刺激になります。今後はCATVならではの新事業にも挑戦したいです」。

読者の声

広報しまだい vol.55に寄せられた声をお届けします。

外国と交流し、学びを深める
島根大学生を見て、自分も留学を
島根大学で経験したいと思いました。

(愛媛県四国中央市・10代女性)

デジタルツールに不得意な人にとって、
広報誌が身近に手に取れると
いいなと思いました。

(島根県浜田市・70代女性)

学生さんが今何を思っているのか、
そして地域の大学がどんなことをしているのか、
面白かったです。

(島根県出雲市・60代女性)

ケガしない豊のような
情報や実現化を、
もっと広めてほしいです。

(島根県松江市・50代女性)

子どもの進学先を検討する上で参考になるかなと
思い読んでおります。よりよい島根を目指す大学として
頑張ってくださいたいです。

(島根県安来市・30代女性)